

ドイツにおける医療と環境

●第1回 ドイツ近代科学史に見られる2つの潮流

岩田 明子(いわた・あきこ)

ドイツのハイデルベルク大学神学部博士課程に留学。その後、フランクフルトにおいて自然療法と心身相関論に基づく心理学を学ぶ。現在、心理カウンセラーとして東京に在住。自然療法に関する翻訳も手がける。日独環境自然療法研究所研究員。



私たちは今、人間を取り巻く環境が人体に及ぼす影響について無自覚でいられないような時代に生きています。環境が人間に及ぼす影響について長年取り組んできたドイツの横顔を「医療と環境」という視点から、

- ①「ドイツ近代科学史に見られる2つの潮流」
- ②「保養地における医療」
- ③「ドイツ統合医療の一例」

と3回にわたってご紹介したいと思います。

明治政府が日本の医療を近代化するに際して、手本にしたのはドイツ医学でした。ところが、ドイツ近代科学史をひもとくと、当時のドイツには2つの潮流があり、それに基づきドイツ医学には2つの側面があることがわかります。日本が意識的に取り入れることをしなかったドイツのもう一つの姿に焦点を当てることで、ドイツにおける医療の全体像を浮かび上がらせてみたいと思います。

まずは、日本が積極的に取り入れた1つ目の流れをご紹介します。それは近代物理学や化学がたどった道で、現象の構成要素を徹底的に分解して微細な粒子や物質を調べ尽くす方法をとります。その流れは、医学の分野では解剖学、細胞学、細菌学などの分野で発展してきました。

細菌学者・コッホ

ドイツ医学を最高峰へと導いた病理細菌学者であるコッホ (Robert Koch 1843 ~ 1910) は、1882年に結核菌、1884年にコレラ菌を発見し、病気の原因が細菌にあるという新しい視点を世に知らしめ、感染症治療への可能性に大きな一歩を踏み出した人物です。のちに結核に関する研究の業績のためノーベル生理学医学賞を受賞するに至りますが、彼の偉大な成果も、この流れの中から生まれ出たこととなります。明治維新に、日本がドイツから取り入れたのは、この流れに限定さ

れていました。

ちなみに、コッホはノーベル賞受賞者を数名含む優秀な弟子を多く輩出しましたが、そのなかには、「日本の細菌学の父」として知られる北里柴三郎 (1852 ~ 1931) がいます。彼は、破傷風菌の純粋培養に成功して、その毒素を証明し、血清療法を創始したことで有名です。

生態学者・アレクサンダー・フォン・フンボルト

次に、もうひとつの流れについて見てみましょう。2つ目の立場は、ある生体について、それをとりまくあらゆる環境因子との“関係性”のなかで調べようとします。この研究方法を打ち立てたのは、近代生態学 (ecology) の祖といわれているアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt 1769 ~ 1859) です。生体を、環境との関連を考慮しながら多角的かつ学際的にみるという彼の研究方法は、病気の原因を細胞や細菌にいたるまで微細にみて、それら一つ一つを、全体を構成する部品として扱おうとする顕微鏡的視点とは全く異なる方向性もっています。

ちなみにアレクサンダー・フォン・フンボルトと同時代を生きた文豪ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749 ~ 1832) は、気象と知性との関連に注目しました。彼は気象観測にまつわる情報を集めて劇作家シラー (Christoph

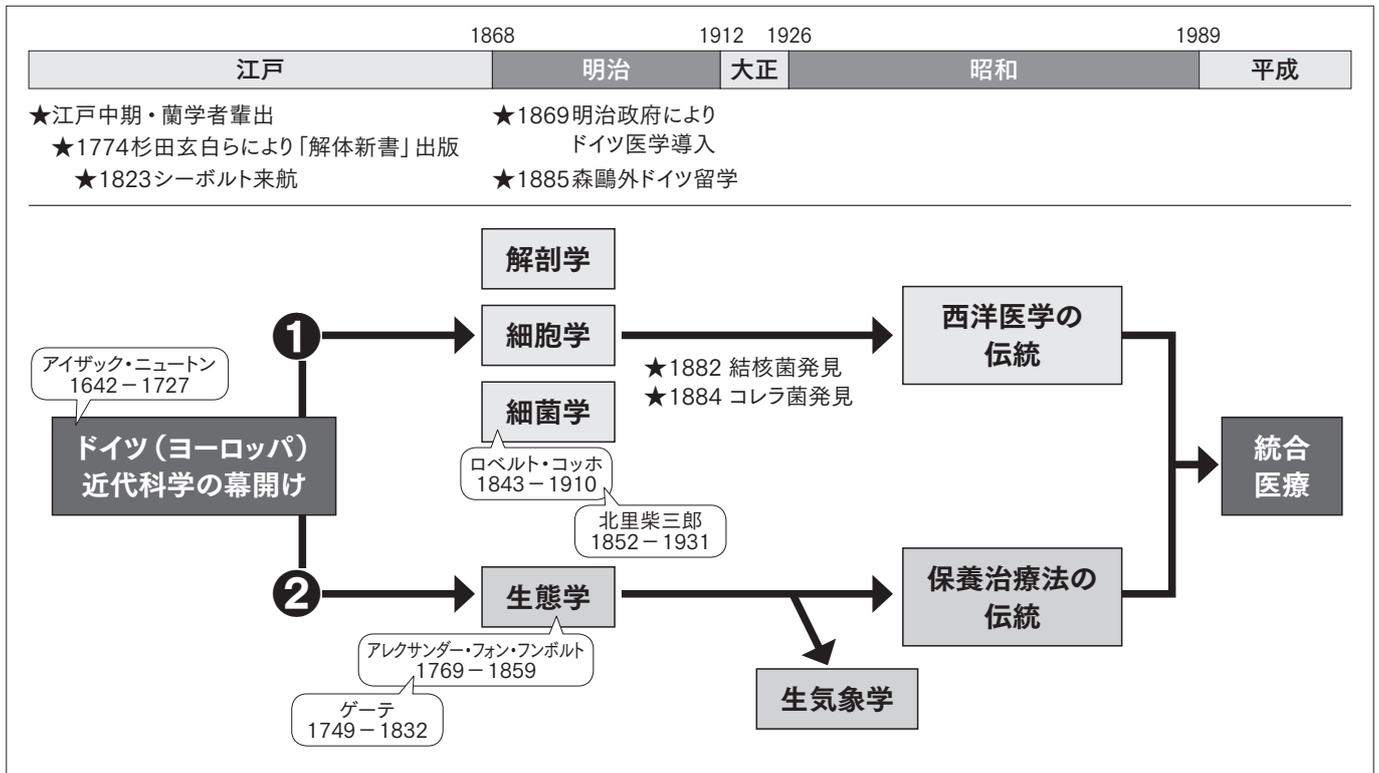
Friedrich von Schiller 1759 ~ 1805) と、それぞれの頭脳の明晰さが風や気温によってどのような影響を受けたかを論じあったようです。当時から、環境との関連のなかで人間をとらえようとする見方があったことがわかります。

ただし、「環境」といっても、それをどの範囲に限定するのか、環境との関連で人間の何を調べたいのかによって内容が限定されることになるので、生態学的方法論は多くの学問領域を生み出していくこととなります。生態学が学際的な色調を帯びるのはそのためです。

たとえば人間をとりまく「環境」といったときには、自然環境だけでなく住居環境といった人工的な環境も含まれますし、気候や日照時間などによる生体リズムはもちろんのこと、人間との関わりを環境にとらえることができるならば、人間関係や、それに伴う心理的ストレスも含まれることとなります。従って、病気の原因や健康へと導く要因を追求するときには、その人をとりまくあらゆる要素が研究対象になるわけです。

では、この2つ目の生態学的な視点は、ドイツの医療の世界ではどのように活かされていったのでしょうか？

ドイツにおいては、近代以降この2つの潮流は、医療の分野でも異なる発展を遂げました。1つ目の流れは、現在でも西洋医学の分野で、ほぼ日本と同じような形で発展し続けているわけですが、2つ目の流れは、おもに「保養地の医療」(温泉療法や気象療法) や、いわゆる「自然



療法」のなかで受け継がれ、発展してきたと考えることができます。

次に、この保養地の医療が発展してきた背景について少し触れたいと思います。

環境と人間の体調

世界的に有名なドイツの保養地医療(温泉療法や気象療法)は、天然の温泉水や泥やガス、そのほか気候要素などを含めて医療に利用します。ドイツでは、そうした天然素材をそのまま放置することなく、治療材料としての自然環境そのものを生態学的方法論を用いて研究する科学が発展していきました。そのなかで重要なもののひとつに「生気象学」(biometeorology)という環境科学の分野があります。

そのなかには環境を気象にしぼり、地域ごとにどのような気象の特徴があって、それが人体にどのような影響を及ぼすかを調べた「生気候地域」(bioclimatic region)に関する研究がありますし、その地域がどの病気に良いか、治療するにはどの気候地域が適しているかといったところまで研究は深められています。

また、生態学と医療の関係で興味深いものといえば、ドイツ気象庁がテレビやラジオを通して放送している「医学気象予報」(Medizin-meteorologische Vorhersage)です。日本でも最近、インフルエンザや花粉に関する予報がありますが、ドイツではじめて放送されたのは1952

年で、その内容は、第二次世界大戦後に気象台、医学、地理学、生物学に携わる研究者たちが協力して、気象と健康について解析した膨大なデータに基づいています。

どのような天気のとときにどのような身体上的変化が生じるのかが天気予報と並行して放送されるのですが、予報は、たとえば次のような内容になります。「バイエルン地方にフェーン現象が起こるので、精神が不安定になる方が多く出るでしょう」「秋の移動性高気圧の影響で喘息になる人が増えるでしょう」「ドイツ北部ベルリン地区では気圧の谷の影響で身体への刺激が強まり、急性の心臓および循環器系の障害が生じる可能性が高くなるでしょう」

このような予報を、毎日のように耳にしていたら、誰でも「気候や環境と自分の体調との関係」を自覚せざるを得なくなるでしょう。

ドイツでは、こうした環境科学が生態学という2つ目の流れのなかから発展し、ある地域に特有な自然環境を活用した医療と結びついて「保養地の医療」が根づいたわけなのです。

統合医療の必要性

冒頭でお伝えした細菌学者・コッホを代表とする偉大なる近代医学の功績によって、確かに多くの難病が克服されてきました。ところが、細菌学の飛躍的な発

展や外科手術の驚異的な進歩のお陰で人々の寿命が飛躍的に延びたために、近年にいたっては生活習慣病や心因性の病といった様々な環境因子を考えながら総合的に診断する必要のある病気が問題になってきていることも疑いようのない事実なのです。こうした背景から、病気の原因を、たとえば細菌にのみ還元する1つ目の方法論だけでなく、人間をとりまくあらゆる環境因子を考慮に入れた2つ目の方法論を活かしながら、この2つの流れをいかに「統合」していくのが医療現場において今後課題になっていくことは明らかです。

今回は、自然療法を含んだ形で行われる保養地での医療について、リハビリテーション医学や予防医学との関わりをなかで、さらに詳しくお伝えしたいと思います。

参考資料

- 「薬と日本人」山崎幹夫著(芳川弘文館)
- 「人間・気象・病気」加地正郎著(NHKブックス)
- 「生気象学の事典」日本生気象学会編(朝倉書店)
- 「生気象学」日本生気象学会編(紀伊国屋書店)
- 「気象と人間」神山恵三著(紀伊国屋新書)

◆おしらせ◆

4月17日(土) 15:50~ 自由が丘にて

「ドイツと日本の環境自然療法に関する勉強会」が開催されます。

講師：横浜国立大学名誉教授 宮脇昭氏(植樹・森づくりについて)、北海道大学医学部名誉教授 阿岸祐幸氏(保養地医療について) 他

主催：日独環境自然療法研究所

※詳細は本誌40P「SEMINAR INFORMATION」参照